

22) PMD 患者の情緒的側面について — Rorschach test による情緒的側面の探究 —

国立徳島療養所

早 田 正 則 川 合 恒 雄
中 西 誠

PMD 患者は成長期といわれる 10 年を病棟という狭い生活空間で、しかも病状の進行を自覚し、人の介助を受け、友の死を体験しながら青年期を迎えてきている。このような成長過程は彼らの人格形成、なかでも情緒的側面に多大な影響を及ぼしていると思われる。そこで彼らの情緒的側面の特性を探り、生活指導の一助とする。

本研究の場合、直接質問するという調査方法よりも、内在的反応が得られる投影法が適当と思われ P-F Study にひきつぎ今回は Rorschach test を実施した。対象は当所入所中の PMD 患者、23 名で、内 21 名がデュシャンヌ型、在所年数 6 年以上が 15 名、4 年以下が 8 名であり、いずれも男性、年齢は 11 才～22 才、上田式障害程度 5 度以上が 19 名となっている。

検査は片口式に準拠して実施した。その結果について片口の基準等をもとに顕著な特徴が認められたものにつき以下報告する。

1. 総反応数では 20 以下のものが半数以上 (15 名) というように少ない。
2. 平均初発反応時間は健康成人 30 秒以下に比べ 17 名が遅く、なかでも 13 名のものが 1 分を越えており、3 分にまで及んでいるものもある。
3. 反応領域については反応数の少ないこともあるが、W% において健康成人の標準を上回るものが 12 名と多い。また Dd % は 18 名が標準を上回っている。
4. 反応決定因では DR 値が少ない。しかもその内訳は ΣC 及び M に反応数 0 のものが高率にでてくるなど 形態反応が優位に出現している。なお F+ % は健康成人の標準を上回るものが 14 名と多い。
5. 反応内容では CR 値が少ない。またその内容では A 反応が多く、H 反応が 0 のものが 5 名含まれるなど少ない。
6. 平凡反応については、10 名が 3 以下というように、健康成人の 4 に比べ低い。

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

PMD 患者は成長期といわれる 10 年を病棟という狭い生活空間で、しかも病状の進行を自覚し、人の介助を受け、友の死を体験しながら青年期を迎えてきている。このような成長過程は彼らの人格形成、なかでも情緒的側面に多大な影響を及ぼしていると思われる。そこで彼らの情緒的側面の特性を探り、生活指導の一助とする。